

豊庄だより



第 691 号 2021 年 12 月 20 日

福岡市早良区南庄 2-26-13
社会福祉法人林生会豊庄保育園
園長 西尾 達

ある福岡市内の小学校の学校だよりを読んでいて、気になったことがありました。そこには、児童と教師に「丁寧な言葉づかい」についてアンケートを取った結果が紹介されていました。児童は、「よくできている」、「まあまあできている」と答えた割合が89%あったのに、教師へのアンケートでは、60%と差があったというのです。児童は出来ていると思っても、教師(大人)の目から見ると、そうではないという指摘でした。子どもたちの会話に耳を傾けていると、「うざい」や「きもい」、あるいはもっとひどい言葉を使っていることがあり、子どもはあまり考えずに使っているかもしれないが、言われた相手はとても傷つくこと、言葉は「ナイフ」にも「毛布」にもなること、言葉を大切に使い、友だちに対して温かい言葉がかけられる子どもになってほしいという内容でした。

このこと自体は全く正しいのですが、多くの子どもたちの間で相手を傷つける言葉がなかなかなくなる現状を見た時、このことを考える際、考え方に何か落ちていることがあるのではと思いました。そんな時出会ったエッセイがあります。清水玲子先生(元帝京大学教授※上の写真)が書かれたもので、タイトルは、「『うるせー、死ねー、あっちいけー』と子どもに言われたとき、あなたは？」(「ちいさいなかま」2021年10月号)。舞台は保育園です。5歳児の「Jちゃん」が食事前にトラブルがあり、「うるせー、あっちいけー」と言って、走って部屋から園庭に行ってしまいました。「Jちゃん」は、甘えるのが苦手で、「ねばならない」意識が強い子で、おとなが声をかけると、「うるせー、あっちいけー」と言って部屋を出ていってしまうことが多かったそうです。担任のベテランのW先生が「Jちゃん」を呼びに行くと、「うっせー」と言いながら部屋に入ってきて、突然エプロンをして食事を配り、当番を終えるとまた部屋を飛び出していきました。「Jちゃん」はテラスにあった大人の上履きを次々に手にして、ごみ箱に捨てるように投げていきました。この様子を見た(別の)保育士が、「なんでそんなことするの！もどしなさい！」と「Jちゃん」の両手を持ち、強い口調で迫っていきました。W先生が怒られている「Jちゃん」のところに駆け寄り、「Jちゃん」に声をかけようとする、「わあーっ」と泣き出し、「さびしかったんだようー」と叫んだのです。



「Jちゃん」の家庭には複雑な問題があり、保育園では「Jちゃん」の大変さをわかろうとして園全体で話をしていたのですが、徹底できていなかったこと、そして、わかっていたつもりでも、この日の「さびしんだよー」という叫びを聞いて、「Jちゃん」の孤独や寂しさの深さを実感したというのです。「荒々しい言葉は、心の叫びなんだ」と学んだそうです。

小学校の学校だよりには、「言葉は心を伝える」と書かれていて、温かい言葉を使うことを求めています。しかし、ここでは「言われた側の気持ち」は強調されていますが、「言う時の気持ち」はあまり取り上げられていません。清水先生のエッセイを読み、子どもがなぜそんな言葉づかいをするのかについて、その背景まで考えて接していかなければ思いました。 ※大人にも同様のことが言えそうですが、こちらはもっと複雑な課題がありそうです。



福岡市保育協会保護者研修会(2019年8月)